審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名　　藤崎　春代

本論文は、幼児が園（幼稚園・保育園）における生活事象の流れという時間環境をどのように理解し叙述するか、叙述の発達過程を、時間環境の再現性(ルーティン性)と非再現性(エピソード性)の二側面から分析し、各々の側面の発達と両者の関連性を検討したものである。園生活への適応を、生活習慣や生活技能獲得の側面から検討した研究はすでに行われてきているが、本論文は生活時間に関する表象という認知的側面に着目し、幼児の叙述の発達とその発達を支える保育環境を実証的に研究したものである。

本論は、２つの予備研究を含めた７研究から成る５部９章構成である。第Ⅰ部では、生活時間環境の理解に関わる先行研究の概括を行い、ルーティン的側面の理解に関しては 、生活時間スキーマの一種である一般的出来事表象(GER)の概念、エピソード的側面に関しては、エピソード記憶研究の知見に注目することの有効性を示している。そして園生活への適応に関わる大学生への調査と発達巡回相談による事例研究を予備研究としてとりあげ、幼児の園生活に注目することの意義と非言語的表象ではなく言語的表象・叙述に注目する 重要性を明らかにしている。

第Ⅱ部では、ルーティン的生活叙述の発達過程について、研究１では園生活の流れについて、３歳から５歳までの３年間計６回にわたる縦断的個別面接調査によって、発達に伴う園生活 GER 構造の一般化を見出している。そして研究２では生活時間環境の異なる２園で生活する幼児２年齢群の叙述を比較することから、所属園により叙述のしやすさや特徴が異なることを明らかにし、GER 形成における時間的環境要因への注目の必要性を示している。

次に第Ⅲ部では、エピソード的生活経験叙述 について、研究３では生活発表場面の観察データの分析から、話題内の構造化、話題間の構造化が５歳時後半に可能となり、時間的枠組に位置づけた生活経験叙述が可能となることを示し、さらに研究４では発表場面での保育者の援助内容・援助方法を検討し、幼児の加齢に伴い保育者の援助と機能が変化することを実証している。また第Ⅳ部(研究５)では、個人内でのルーティン的生活叙述とエピソード的生活経験叙述を２年間の縦断研究データから比較検討することにより、ルーティン的生活叙述の先行、優位性、および園生活 GER を基盤として用いながら園でのエピソード的生活経験叙述を行う幼児が加齢とともに増えてくることを見出している。そして第Ⅴ部(９章)では、これまでの知見から、総合的に日常生活叙述の発達過程への考察を行っている。

以上のように、時間環境の表象に着目し幼児の叙述から生活理解を捉えた本論文は、幼児期の認知発達、特に出来事表象の記憶と叙述領域の研究に新たな示唆を与えるとともに、保育における時間的環境構造の重要性を明確にし、環境構成や保育者の援助のあり方に対し、大きな寄与をなすものと評価される。よって、本論文は、博士（教育学）の学位論文としての水準を十分に充たすものとして評価された。